



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	悟性的世界観の批判の学問としてのヘーゲル論理学：『大論理学』「本質論」における同一性の命題の解釈に基づいて
Author(s)	藤本, 忠
Citation	哲学, 40, 1-16
Issue Date	2004-07-18
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/35018
Type	departmental bulletin paper
File Information	40_RP1-16.pdf



悟性的世界観の批判の学問としてのヘーゲル論理学

——『大論理学』『本質論』における同一性の命題の解釈に基づいて——

藤本 忠

1 はじめに

ヘーゲルの『論理の学 (Wissenschaft der Logik)』（以後『大論理学』と略¹）は、極めて難解な著作であり、一般にヘーゲルの哲学の中でも、意味不明な著作として遠ざけられてきた²。例えば、V・ヘースレは、哲学の歴史の中でも、ヘーゲルの『大論理学』を、最も難解な書物と位置づけている³。こうした難解さのためか、日本の高等学校の倫理学の教科書によく見られるような、「正」、「反」、「合」という紋切り型の図式が、ヘーゲル哲学、および弁証法の理解のために安易に用いられてきた。実際、ヘーゲル以後、唯物論的哲学における自然弁証法などで、この図式は多用されている⁴。K・ポパーは、こうした図式を通じてヘーゲルの論理学を理解し、科学的知識の進歩に対して無益、有害な教えと考え、ヘーゲル哲学に辛辣な批判を加えたことは有名である⁵。

しかし、ポパーの批判は、ヘーゲルの弁証法や論理学が、社会や科学の進歩を引き起こす方法論や思想と解釈された上での、つまり、マルクスらによるヘーゲルの論理学の理解を媒介にした上での批判である。言い換えれば、ヘーゲル論理学の一解釈に対する批判なのである。だが、その批判が、ヘーゲル哲学、『大論理学』そのものを理解した上での批

判であるとは到底いえない。むしろ、ポパーの見解とは逆の観点がヘーゲルの論理学には含まれていると考えられる。それは、ヘーゲルの論理思想には、科学理論の進歩の論理学という観点ではなく、我々の科学的世界観、あるいはヘーゲルの言葉を使えば、悟性的世界観を批判する観点が含まれている、ということである。

本論は、こうした点を明らかにするため、ヘーゲルの『大論理学』『本質論』に現れる、同一性の命題に対するヘーゲルの思想を扱う。そして、悟性的世界観（これは、本論で触れるように、科学的世界観でもあるのだが）に対する批判の論理として、ヘーゲルの論理学を捉えなおしてみたい。まず、2節において、「本質論」前半部分の「反省規定」と「本質性」の概要をまとめる。3節で、ヘーゲルの同一性の命題に対する解釈を整理し、その意味するところを論じたい。その上で、哲学と科学の差異を、ヘーゲルの同一性の命題の解釈の枠内で考えてみたい。

2 「本質論」における「反省規定」及び「本質性」と悟性的世界観の関係

『大論理学』は大きく「存在論」、「本質論」、「概念論」に区分される。そのうち、「存在論」と「本質論」は「客観的論理学」といわれ、「概念論」は「主観的論理学」といわれる。「本質論」は、「存在論」と「概念論」の中間にある。ヘーゲルの論理学の記述は、かの有名な、*Sein-Nicht-Werden*、すなわち「存在」、「無」、「成」によって開始されるが、「本質論」では、「存在論」で議論された、「存在」や「無」、「成」が、新しい観点から議論される。まず、本論に必要な範囲内で、以下、簡単に、「本質論」前半の記述を整理する。

本質とはヘーゲルによれば存在の真理である。「存在の真理は本質である」(6.17)。「存在」は、ヘーゲルによれば、いまだ直接的な対象であり、我々が、そこに何か一定の規定を持ち込む以前の対象である。我々が、ある一定の観点からその直接的な対象を規定するとき、「存在」は「本質」として規定される。例えば、我々が、全く見たこともない何か

或る物に出会い、それが何であるか考えるとき、その或る物は単に或る物ではなくなり、何かしらの性質を付与される対象、つまり、それが「何であるか」という本質を、我々が求めようとする対象になる。この対象について議論される箇所が「本質論」である。しかしながら、我々は、すぐさま、或る対象の本質に立ち入ることができるわけではないだろう。例えば、太陽を考えよう。⁸「太陽とは何か、太陽の本質とは何か」と、問われたらしよう。太陽とは何であるのかを論じる天文学は、太陽と名指される対象物からさまざまなデータを解析し、ある一定の回答を提示するであろう。例えば、太陽とは「地球から一天文単位にある星」である、とか、あるいは「スペクトル型がG型である」などと。もちろん、天文学者はこうした太陽のあり方が全てであるとは思っていないであろう。太陽について論じるべき規定は数限りなくあるであろう。こうした規定は、ヘーゲルによれば全て、太陽の本質ではなく「仮象」と表現される。というのも、「スペクトル型がG型である」とは、太陽の「本質」そのものではないからである。少なくとも、その規定は、太陽の本質（その本質があるとすれば）の一つの現れにすぎないからである。その現れが「仮象」である。「直接的存在はさしあたり、非本質的存在である」(G.17)。しかし、天文学者は、より多くの太陽に関する規定を集めようと努力する。そして、そうこうしているうちに、太陽から与えられる膨大なデータについて、何らかの類別をはじめ。そして諸データに対して、階層的構造を考え始める。例えば、太陽のスペクトルは、太陽の表面温度から導き出せると考えられるようになる。さらに、太陽の表面温度は、太陽の質量や成分と関係していると考えられるようになる。つまり、太陽の質量や成分から、太陽の表面温度が推測でき、それが太陽のスペクトルを規定していると考えられるようになる。このとき、天文学者は、「そうか、太陽の本質とは、太陽の質量と成分なのだ」と考える。このときの状態をヘーゲルは次のように論じているものと思われる。「しかし、第二に、非本質的存在は、非本質的存在以上のものであり、それは本質を欠いた存在、それは仮象である」(ebd.)。ところで、知的好奇心に満ちた子供が、「じゃ、どうして太陽の質量は $1.99 \times 10^{30} \text{Kg}$ で、水素とヘリウムからできているの?」と聞くとしよう。すると天文学者は、さらに、太陽系の成立過程や宇宙創成

に関する話を持ち出すかもしれない。そして、今、知りうる限りの太陽に関する知識を全て子供に説明し、太陽の本質とは、「スペクトルG型で、銀河系の中心から約3万光年の距離にあり、……、なんだよ。だから、太陽の質量は $1.99 \times 10^{30} \text{Kg}$ で、水素とヘリウムからできているんだよ」と締めくくるだろう。この時、子供にとっても、天文学者にとっても太陽の本質は様々な規定、性質である。この本質を様々な規定とみなすこと、これがヘーゲルの反省である。

「第三に、こうした仮象とは、外面的なもの、本質にとつての他者ではない、むしろ、それは本質固有の仮象である。本質のそれ自身における仮象は反省である」(ibid.)。つまり、本質とは、反省を通じて仮象として現れるのである。この反省は、ヘーゲルによれば、「措定的反省」(6.25)、「外的反省」(6.26)、「規定的反省」(6.32)に分けられる。この反省論については、太陽の例でいえば、次のようになるだろう。天文学者が、本質の一つとしてスペクトルG型を立てるときが、措定的反省であり、太陽の本質の一つとしてスペクトルG型が定められ、宇宙百科事典に載せられた段階が外的反省であり、スペクトルG型以外の規定が太陽の本質として捉え返され、宇宙百科事典の第二版・増補改定版が書かれる段階が規定的反省である。¹⁰⁾

こうした反省の段階は、まさに科学的知の営みといえるだろう。そして、天文学者は、多くの規定を通じて太陽の本質を捉え直そうとするであろう。こうして様々な規定のあつまりとして捉えられた本質なるものが、「本質性(Die Wesenheiten)」あるいは「反省規定(Die Reflexionsbestimmung)」である。「反省は規定された反省である。それによって、本質は規定された本質である、あるいはそれは本質性である」(6.35)。このように、「本質論」前半は、科学的知の営み、あるいは、日常、我々が何気なく行なっている知の営みが論じられている箇所である。ヘーゲルは、こうした反省規定を、イエーナ時代から、悟性的哲学の成果、つまり悟性規定とみなしている(Vgl. 2.25-26)。したがって、ヘーゲル哲学の用語に照らしていい直せば、科学的知の営みは、悟性的知の営みなのである。

3 ヘーゲルによる同一性の形式に対する批判と真の同一性の理解

ヘーゲルは科学的知の営み、悟性的知の営みとしての「本質性」、「反省規定」箇所において、古典論理学の範囲内ではあるが、いわゆる形式的論理学、特に同一性の形式に対して、興味深い解釈を行なっている。そして、この解釈は、我々が科学技術全盛の時代の中で、立ち止まることなく鵜呑みにしてしまう思惟のあり方に対する批判にもなっているだろう。

ヘーゲルの記述は明快ではないのだが、二つの側面から、同一性の悟性的な捉え方に対して批判を加えていると思われる。そして、以下の二つの側面は、実は、我々の普段の日常的悟性的知の営みと関連している。その二つの側面とは、

①同一性の形式が、差異の形式との関係の中でのみ意味をもつ、という形式性に関わる側面。

②同一性の形式そのものに内在する非同一性の側面。

この二側面である。両者は密接に関係しているが、本論では、一旦、両者を分けて論じたい。とくに、普通、我々は、同一性の形式と差異の形式は全く別だと考えている点で、ヘーゲルの①の指摘は重要な論点を含んでいる。では、①からみていきたい。

3.1 同一性の形式に関わる問題

例えば、「AはAである（ $A \parallel A$ ）」という命題は、一般に同一律、同一性を表す形式、といわれている。今、Aに命題が入るか、名辞が入るかについては、本論では特に考慮に入れない。大切な論点は、こうした形式そのものが全く独立した形式として、我々の思惟の根本に存在する第一原理であるという世界観に対するヘーゲルの批判である。

ヘーゲルは、同一性の形式を「空虚な同語反復（トートロジー）」の表現以上のものではない（611）、あるいは「形

式的な真理、抽象的で不完全な真理を含むのみである」(S. 42)と述べる。そしてそれに対してヘーゲルは、そもそも同一性の形式が意味をもつのは、同一ではない形式、非同一の形式との関係においてのみであると論じる。「真理とは同一性と差異性との統一の中でのみ完全なのである」(ibid.)。

例えば、太陽は太陽である限りにおいて同一である。しかし太陽が太陽である、ということを経回唱しても太陽の意味は分らないであろうし、何も論じたことにはならないであろう。上の命題が意味をもつのは、太陽が、例えば、地球ではないという規定をもつ場合である。しかし、地球と太陽が異なるのは、至極当然のことながら、太陽が太陽でないとは分かつているからである。つまり、ヘーゲルの主張は、太陽の自己自身との同一性は、太陽の非同一性の中ではじめて意味をもつということである。

しかし次のような反論があるかもしれない。今、意味¹¹といったが、太陽という具体的な名辞、個体を論じるためには、形式と対象、論理と世界の対応関係、意味と意義の相違を議論に入れなければならない(総じて、「意味論」を考慮しなければならぬ¹¹)。あるいは、もつと抽象的な形式、意味論以前の形式を扱えば、同一性の形式とは世界を論じる形式的原理であり、意味論を考慮に入れなくても、統語論的には、あるいは形式的には、真理値計算において確実に恒真である、欠くべからざる思惟の論理なのだ、と。確かにそうではあるが、 $A \parallel A$ の様な極めて簡単な数式、論理的式でさえ、一体、何を我々は前提にしているのだろうか、と考察する必要がある。Aという文字がB、Cと違うから同一といっているのではないのだろうか。これはあまりに浮薄な議論だと思われるであろう。だが実際、同一性という形式で何かしらの対象を語るには、Aノと叫ぶ以外の発話、記述が必要である¹²。もし、我々が同一性を表す今の式によって対象を論じるためには、同一性原理から離れなければならない。もし離れる必要がないのなら、我々は何も思惟する必要はない。この世界に一つの「A」しか(Aが一つという意味ではない)存在しないなら、世界は直接的、無規定的な存在(「存在論」冒頭の「存在」、すなわち「無」)のみとなり、消滅するだろう。しかし、形式的論理学の場合にも、

同一性に関する形式だけが、世界を語る形式とは考えられていないであろう。否定詞を含む形式も存在する。だが、この同一性の形式と非同一性の形式の二つの形式を分離して考える限り、結局、その形式は空虚だとヘーゲルは考えている。「それで、同一性そのものを、ある真理ととって、同一性は差異性ではなく、そればかりか同一性と差異性とはいつも違うものだ」と主張している人は、この空虚な同一性に固執しているのである。そういう人たちは、そのとき、同一性は一つの差異的存在であると述べているのを知らないのである」(6.4)。つまり、同一性を論じる形式は、差異を論じる形式から区別されていることにおいて、同一性の形式なのであり、Aに具体的な命題や名辞を入れようが、入れまいが、同一性の形式は、それだけが、疑問の余地なく第一原理として定立されているのではない、とヘーゲルは論じている。¹³ 言い換えれば、同一性を論じる形式は、本来、差異を論じる形式と無関係に並立して存在しているのではない、とヘーゲルは論じているのである。

同一性の形式が人間の思惟規定の根本原理であるといわれる場合、我々はそう教示されることによって、我々の脳のどこかに、こうした機能をつかさどるブラックボックスがあると考えてしまう。だがそうした同一性を確認するためには、実際には「経験を基礎にしている」(6.42)のだとヘーゲルはいう。すなわち、太陽が太陽であるという命題が、何らの基礎付けも必要とされないというとき、「各人の意識の経験」(ed.)が前提されているにすぎないといわれる。例えば、あまりにも当たり前すぎて「太陽は太陽である」を疑う者がいないのは、太陽が何であるのか、我々の共通の教養が前提されているからである。そこで、ヘーゲルは、かの同一性の形式の無前提性という考えそのものが一般に受け入れられること自体、経験を担保にした「保証 (Versicherung)」(6.43) にすぎないと論じる。したがって、ヘーゲルによれば、同一性を論じる形式が、脳のどこかに前もって埋め込まれているア・プリオリな形式であるという考え方は意味をなさない。¹⁴

さて、ヘーゲルは、同一性の形式を前もって立て、それによって、対象、世界を論じることによって、むしろ、同一

性という形式がもつ無力さが暴露されるという。この点が②と関係する。では、②について考えよう。

3.2 同一性の形式に内在する非同一性

「植物は植物である」という返答が「植物とは何であるのか」という問いに対してかえされるとすれば、そうした命題の真理は、これを確かめる全ての仲間に認められると同時に、こうした命題によって、異口同音に、無をいわれていることが主張されるであろう」(6.43)、とヘーゲルは論じる。植物という概念が主語に立てられるとき、我々はさまざまなことをすでに知っている(仮に知らないとしても、シヨクブツという言葉の響きとは別の響きを期待する)。だから我々は何かいままで知っているのとは違う「異なる規定」(andere Bestimmungen)を期待しているのである。植物の規定とは「動物ではない」こと、「葉緑素をもったもの」であること、「光合成を起こす」こと。だからこそ、植物は動物ではないという命題が同時に成立する。植物についての同一性を論じようとしたたん、つまり植物を主語に立てたたん、同一性の形式は、何も語り得ない形式として予測されてしまっている。言い換えれば、同一性の形式は世界のあり方を語る形式ではありえないのである。

そもそも、ヘーゲルが同一性の形式、命題を批判的に論じる舞台は、本質が仮象となつて規定されている本質性の箇所である。それゆえ、同一性の形式に関する哲学的洞察は、この本質性の舞台の上では不可能である、とヘーゲルは考えている。そこで、本質性ではなく、本質に関わるヘーゲルの論述をみてみたい。ヘーゲルは次のように論じる。「本質は、しかし、存在の絶対的否定性である。本質は存在そのものである。しかし、単に他者として規定されているだけではなくて、むしろ直接的な存在としても、ある他在に取り付かれている否定として、直接的な否定としても廃棄された(aufgehoben hat)ところの存在である」(6.19)。先に触れたように、本質は仮象という形で反省を通じて本質性(反省規定)となる。しかし、そもそも、本質性の母体とみなされている本質は、存在の絶対的否定性だとヘーゲルは述べて

いる。上の引用を噛み砕くと、こうなるだろう。太陽の本質は、太陽と名指される以前の対象を表していない。¹⁶つまり、太陽の本質は、あの丸い物体ではない。かといって、あの丸い物体とは別のものではない。にもかかわらず、本質を問われた「太陽」なるあの丸い物体は、もう、太陽である以前の丸い物体の姿を完全に捨て去ってしまっている。

だが、普通、我々は、一定のあり方をした太陽なる実体、存在（それが太陽と名づけられる以前のあの丸い物体）を前提することなしに太陽の本質なるものを議論することは不可能であると考えている。なぜなら、あることからの本質であると規定されたあり方、つまりデータは太陽について語られるものであるのだから。データの世界は外的反省といわれた。だが、ヘーゲルは、こうしたデータの集積の世界は本質性の世界であつて、本質とは考えていない。

我々は、通常、対象物のデータは、その対象が付着している本質から出てくるように思っている。しかし、そのデータを指定、設定する我々の知の営みは、ヘーゲルによれば、勝手に本質の存在を仮定している知の営みにすぎないのである。しかし、本当は、「指定的反省は無からはじまる」(G.33)。すなわち、本質性の母体は、本来、無なのである。太陽の本質が、ある一定の存在、太陽のアイデアとして厳然と本質性の裏側に控えている、というモデルをヘーゲルは考えていない。¹⁷

もう一度、太陽を例にとり同一性の命題を考えてみよう。「太陽とは何であるか」という問いに「同一性の形式」が従った瞬間、実は同一性からの分離、離脱を生み出しているのだ、とヘーゲルはいう。「同一性はそれが、分離そのものであるというところに存すること、または、分離の中で本質的であることに存するのであり、すなわち、同一性が対自的に(für sich)あるのではなく、¹⁸分離の契機であることのなかに存するのである」(G.42)。そして「単に同じ事が繰り返されることによって、かえつてその反対が生じ、無が現れる」(G.44)。「太陽は太陽である」は空虚な同語反復である。この繰り返しは、実は何も論じていない無である。しかし、太陽が「スペクトルG型である」とか、太陽とは「恒星である」といった本質性の世界を経た「太陽は太陽である」は、太陽の規定が含まれた命題とみなされ得る。つまり、「太陽

は太陽である」という同一性命題は、太陽という主語に対して、非同一的な分離、つまり、反省規定を持ち込むことにおいてのみ、意味をもつ。このようなことは、至極当たり前だ、といわれるかも知れない。しかし、我々は、日々の生活において、本質という事柄と、その本質が論じられる対象の自己同一性の保持ということを、度々同一視している。例えば、机の本質は、永遠に変わらない、机そのものである、などと。

「太陽は太陽である」という同一性の論理は太陽の規定を得るためには捨てられなければならない。だが、「スペクトルG型」が太陽の規定であることが分かるためには、「太陽は木星ではなく、太陽である」という自己保持の同一性論理が保たれなければならない。ヘーゲルによる同一性の形式の内部にある非同一性とは、こうした論理の側面を指しているのである。

以上をまとめよう。ヘーゲルは、同一性の形式に含まれている非同一性の形式、すなわち、差異の形式は(②の観点)、「本質性」、「反省諸規定」においては、つまり、悟性的思惟、科学的知の中では、同一性の形式と非同一性の形式に分離されると考えている。ゆえに、逆に「本質性」、「反省規定」の世界において同一性の形式が差異の形式と分離されているということが、そもそも悟性的であり、正しくないと認識されるならば(①の観点)、②の観点に戻り、同一性の正しい理解が得られるということになる。

さて以上のような同一性の形式、命題に対するヘーゲルの解釈を念頭に置き、「太陽の本質とは何か」という問いに返ろう。

4 哲学と科学の間

「太陽の本質とは何か」という問いかけに対して、普通、我々はこういった回答を期待しているだろうか。少なくとも、太陽そのものを的確に論じ、かつあらゆる視点からみて普遍的規定なるものを多くの者は期待しているのではないだろうか。太陽とは恒星である。恒星という概念は太陽を含む類概念である。その限り、確かに太陽のもっている本質といえるかもしれない。だが、類概念である限りにおいて、すでに、かの地球から一億五千万キロ離れた恒星そのものを指示できなくなっている。¹⁹⁾

太陽の現れである「本質性」をまとめ上げ、類別化する知の営み、この営みは、まさに科学の知の営みである。そして、そのことによって科学は太陽の本質が捉えられたと誤解する。科学は、太陽の性質、規定を数多く集積する。そしてその集積のデータの中に埋没した科学的知は、このデータを類別化し、そのデータの中に階層構造を作り上げる。ところが、階層構造の最上階の規定の内包は太陽という個体を指示できなくなっている。さらに、この階層構造は、我々が外的に持ち込んだ構造であり、太陽が自分で決めた構造ではない。我々が、或る一定の根拠に基づいて規定したデータにもとづいているにすぎない。こうした知の営みは、ヘーゲルによれば、「反省」の営みであるにすぎない。加えて、「本質性」の世界では、どのような規定も形式上、太陽の自己同一性の論理を破る。太陽はスペクトルG型そのものではない。太陽は恒星という類概念そのものではない。それにもかかわらず、我々は、無頓着に、「太陽は恒星だ」と語る。そこには、「太陽は太陽である」というトートロジーが了解されている。だから、木星がスペクトルG型ではなく、太陽がスペクトルG型である、と分かる。その限り、「太陽は太陽である」は空虚、無ではなくなる。

ヘーゲルの論理学は、こうした点に科学的知の裂け目を見出し、科学的知の営みの原理的限界を批判する学問として捉え直されるべきだろう。科学的知は、ひたすら自己保持の論理を前提して太陽の本質を探す。しかし、それは、我々

がある一定の見地から指定する規定であり、太陽そのものの本質ではない、「本質性」である。しかし、どんな本質性も、太陽の本質ではない。しかし、かといって、太陽の本質を端的に論じる論理を我々は所持していない。「太陽は太陽である」という同一性の命題は、太陽の自己同一性を保持しているが、その同一性の形式に固執する限り、太陽は空虚、無である。つまり、本質は空虚である。科学的知、本質性に太陽の全ての規定は現れている。だが、その規定は、絶対に太陽そのものではないのである。哲学は、この本質と本質性(仮象)の裂け目を洞察し得る学問といえるかもしれない。

論理の形式性が思惟規定の原理といわれる場合、我々は常にいくつかの点に注意を払わなければならない。特に近代哲学の流れの中で「原理」という概念が取り出される場合、それが、常にそれ以上疑義を差し挟む余地のない最高の規約、ア・プリオリな形式性と理解されがちである。しかし、同一性という単純な論理形式でさえ、太陽の本質を論じる場合には無力なのである。そして、こうしたア・プリオリな形式を立てるといふ知の営みこそ、悟性的、科学的な人間の知の一側面であり、悟性的世界観の現れなのである。しかし、ヘーゲルによれば、こうした知の側面は、理性的思惟、哲学的知の営みとは異なる。悟性的、科学的知では、決して到達、認識できない本質認識なるものが確かにある。それを論じることが、哲学の仕事であり、科学的知、科学的世界観の原理的限界を批判することも、また、哲学に課せられた使命なのである。

5 おわりに

本論では、同一性という論理に焦点を絞って論じてみたが、例えば同一性という論理のあり方は、対象を論じるための論理ではなく、一種の機能であるという見方、あるいは「教」などの特定の対象に限られる論理である、という反論もあるであろう。この点は、また改めて考える必要がある。だがさしあたり、本論の議論を踏まえれば、次のことはいっ

てもよいのではなからうか。すなわち同一性の機能という問題設定そのものが「何が」同一かという事柄を無視したとき、はじめて意味をもつということである。

註

本論のヘーゲルの著作からの引用は Suhrkamp 版ヘーゲル全集によっている。本文の中で巻数とページ数を記した。引用文中の太字は、本文中の斜体文字を表す。傍点は、筆者の強調箇所である。

◎本論は文部科学省科学研究費補助金によって行った研究成果の一部である。

1 第一版一八二二年、第二版一八三二／二年。一般に『大論理学』と訳されているが、この訳は適切ではないと思う。この点は、フィヒテの知識学 (Wissenschaftslehre — 「学問論」) にもいえることであると思うが、本来は、「論理の学」つまり、「論理学」についての学問」である。

2 Vgl. P. O. Johnson, *The Critique of Thought. A re-examination of Hegels Science of Logic*, Hampshire, 1988, P. 1ff.

3 Vgl. V. Hösle, *Hegels System. Bd. 1. Systementwicklung und Logik*, Hamburg, 1988, S. 155.

4 「正」、「反」、「合」とは、These, Antithese, Synthese, の訳語である。ヘーゲル哲学に対して、こうした訳語によって解釈を加えた日本の思想家として、例えば、田邊元がいる。田邊のヘーゲル解釈が、今日も影響を与え続けていると考えられる。水見潔「田邊元「種の論理」とヘーゲル弁証法」、「ドイツ観念論との対話6——ドイツ観念論と日本近代」茅野良男(編)、ミネルヴァ書房、一九九四年、八三〜八六ページ、参照。また、十九世紀の自然科学において、この「正」、「反」、「合」の図式が用いられる背景には、マルクス思想の影響は無視できない。加藤尚武、久保陽一(他編)『ヘーゲル事典』弘文堂、一九九二年、二八九〜二九〇ページ(島崎隆による)の解説参照。ヘーゲル自身は「正」、「反」、「合」という用語を使用したことはない。

5 Vgl. K. R. Popper, *What is Dialectic? in: Mind, New Series*, vol. 49, No. 196, 1940, P. 403-426.

6 ヘーゲルの引用に沿って理解を求めるには、例えば、高山守『ヘーゲルを読む』放送大学教育振興会、二〇〇三年、二二四〜二四三ページ、あるいは、高山守『ヘーゲル哲学と無の論理』、東京大学出版会、二〇〇一年、三〇二〜三八二ページの該当箇所を参照されたい。

7 ヘーゲル哲学における「真理」とは、アリストテレス以降の対象と主体の一致に基づくという意味に限られるだけではない。「真なるものは全体である」、といわれるように、ヘーゲル哲学においては概念によって捉えられた現実全体が真理である。したがって、真理は概念と実在の対応論的な意味に固定化されない。ヘーゲルに影響を与えたシェリングの前期哲学には、精神と自然の一致とい

う真理観が見られる(この点は、拙論「シェリング哲学における真理論——精神と自然の一致をめぐる問——」、『シェリング年報第11号』(日本シェリング協会(編)、晃洋書房、二〇〇三年、八二〜九三ページ、を参照されたい)。ヘーゲルはこうしたシェリングの真理観を考慮に入れつつも、対象と認識の一致という問題そのものを、弁証法の中で概念そのものの自己運動に転化させたと考えられる。

8 実、ここまで述べてきたような、我々が対象と出会う、という例は、「存在論」における「存在」を表現する例として適切ではない。というのも、我々は、存在によって規定され、存在は我々によって規定されているのだから、我々という規定がそこに見出される限り、ヘーゲルのいわんとする端的な存在とは異なる。また、「我々」という主語もヘーゲル哲学の中では重要な論点になる。しかし、論述が抽象的になることを避け、以下、できるだけ具体的に論じるため、本文のような例を持ち出した。ちなみに、「存在論」の議論を踏まえると、太陽という対象に対して、我々がそれを太陽と名指しすることは、本来できないのである。できるとすれば、おそらく、「あのもの」という指差しであろう(これが所謂「定在(Dasein)」)。「存在論」においては、太陽の本質は未知である。つまり、太陽と規定できない太陽なる対象なのである。

9 反省規定の立ち入った説明は D. Henrich, *Hegels Logik der Reflexion in: Hegel-Studien Beiheft 18, 1978*。ヘーゲル論理学の説明原理を「反省」という方法論においた論文で多くの示唆に富む。あるいは、小坂田英之「ヘーゲルにおける「反省」概念」、理想六四一号——特集「ヘーゲル論理学」、理想社、一九八九年、三六〜四六ページ、P. Reisinger, *Reflexion und Ichbegriff, in: Hegel-Studien Bd. 6, 1971, S. 231-265*、高山守「ヘーゲルを読む」、二二六〜二四二ページ、参照のこと。

10 上の例でいえば、ニュートン力学から一般相対論へと力学の理論が拡張される場合も規定的反省の営みであるといえる。つまり、かつて、力の本質を表現している力学がニュートン力学であると考えられていたが、反省規定による捉え返しにより、より適切な力学の本質の表現形態が存在するとされ、一般相対論が構築されたこととみるのである。最新版の百科事典には、ニュートン力学の一般化として、一般相対論が記載されていると考えられよう。

11 意味論の話を検討に入れるならば、話は尽きないが、参考までに記しておく。フレーゲは、 $A \equiv A$ と $A \equiv B$ の違い、解釈に「意味(Bedeutung)」と「意義(Sinn)」の関係を持ち込み、区別を与える。ラッセルは命題関数の差異の理論に持ち込むが、完全に、外延の論理によってフレーゲの解釈を越えているのかどうか、疑問視されていることはよく知られている。もちろん、フレーゲの理論の理解には、文脈原理や合成原理を考慮に入れる必要があるが、ラッセルの場合にも、固有名との関係を考える必要があるため(例えば、飯田隆「言語哲学大全」、勁草書房、一九八七年、など参照のこと)、ヘーゲルとの単純な比較はできないことはいうまでもない。ただし、ヘーゲルの論理学全体を、言語の意味の構築理論と考えられないこともない。

12 例えば、ウィトゲンシュタインであれば、対象の同一性と記号の同一性を同一視しているから、 $A \equiv A$ は自動的に真であるが、 $A \equiv B$ は偽となる。野本和幸「現代の論理の意味論——フレーゲからクピアキまで」、岩波書店、一九八八年、九十八ページ。

13 ここまでの議論で、次のような疑義が呈せられるかもしれない。つまり、形式的論理学は、数学の対象や論理形式の形式的展開に限れば、ヘーゲルのような議論は必要ない。もつともであろう。ヘーゲルは、こうした形式的論理の展開過程や、統語論的構造に疑問を提示し、批判し、形式的論理を否定しているのではないだろう。ヘーゲルは、そうした形式的論理学の存在論的可能性や、形

式性のあり方の原理的限界を人間の思惟の構造との関係において批判的に吟味する視点で、形式的論理学を問題にしていると思われる。

14 本論では紙幅の都合で立ち入ることはできないのだが、ヘーゲルのこうした議論がア・プリオリ、ア・ポステリオリという二分法の議論に抵触しているわけではない。ア・プリオリなものはア・ポステリオリなものでもある、とヘーゲルは理解している。すなわち、ある一定の原理をヘーゲルは据えていない。加藤尚武『ヘーゲル「精神現象学」入門——新版——』、有斐閣、一九八三年、十三ページ、あるいは加藤尚武『ヘーゲル、パース、ワイトゲンシュタイン、クワイン』、『ヘーゲル論理学研究・創刊号』（ヘーゲル論理学研究会（編）、一九九五年、四ページ以降、参照。ここでの加藤の議論は参考になる。ア・プリオリとかア・ポステリオリという概念が、固定された「原理」とか「経験」といった概念に結びつく必然性はヘーゲル哲学にはない。ヘーゲルが「経験」という場合、その都度その経験は次の立場において原理となるア・プリオリな経験でもある。ヘーゲルの立場は加藤の言葉を借りれば、「アルキメデス点」をもたない、ということである。実際、ヘーゲルは、『精神現象学』において、「哲学の原理というものは、真である場合には、ただ原則、または原理としてある限り、すでにそれだけの理由で、また偽である」(327)、と述べている。

15 「何もいわれていない」、ということ。

16 「以前」ということはヘーゲルの論理学の世界においては時間を意味しない。したがって、様相論理学でよく現れる個体論のソーセージ・モデルなどでヘーゲルのこの論述を解釈することは正確には、正当ではないだろう。むしろ、「以前」の世界は、ライブニッツ的な可能的世界のような世界と考えた方がよいだろう。

17 こうした点は、本質性のいわば束である「現象」の概念の解釈や、因果論についても妥当する。こうした点については以下を参照された。加藤尚武『ヘーゲル論理学の中の「実体」と「因果」』、『千葉大学 人文研究 第二十三号』、一九九四年。加藤尚武『本質は現象する』、『理想六四一号——特集 ヘーゲル論理学』、理想社、一九八九年、十四～二十二ページ。高山守『ヘーゲルの因果論』、『東京大学文学部哲学研究室 論集十三号』、一九九五年、一～十六ページ。

18 要するに、同一性が「単独で」あるのではない、ということ。

19 伝統的な論理学（ここではいわゆる古典的形式的論理学）の教科書に記載されていることなのであるが、例えば、アリストテレスの「第一実体」と「第二実体」のことを思い浮かべていただければよい。「太陽」は第一実体である。「恒星」は第二実体である。恒星は太陽よりも外延が広いが、そのために内包が薄れている。

A critique of our ordinary scientific views: Hegel on the proposition concerning “Identity”

Tadashi FUJIMOTO

Hegel's *Science of Logic* has been interpreted variously. For instance K. Popper argued that Hegel's dialectic in *Science of Logic* was logic which had a relation to progress of social and natural sciences. And he expressed sharp criticism to Hegel's Logic. However his criticism was not directly on the basis of Hegel's dialectic, but on the basis of Marx's dialectic.

In this paper, I oppose such an interpretation concerning Hegel's Logic, and I would like to interpret Hegel's Logic as logic which is to criticize to the thought process of our ordinary scientific views. For the purpose of that interpretation, I treat Hegel's view on “Essentiality” in *Science of Logic* and investigate into the proposition on “Identity”. In Hegel's argument, identity and difference are united into one, and Hegel insists that identity is separated from difference through our ordinary thought process.